

「武家文化」の意味

文と写真、構成 = 樹心院 華林

発行 = 2011年12月、2013年1月（彩流華第22・25号）

武家文化と公家文化

日本の伝統的な文化を「武家文化」と「公家文化」に区別することがあります。武家・武士の文化を武家文化、公家・貴族の文化を公家文化と呼ぶわけですが、では具体的な言葉でそれぞれを説明しようとする、かなり曖昧な定義しかできないことに気がつきます。一般的に思いつくのは武家文化の『質実剛健』に対する公家文化の『雅』でしょうか。

武家文化で代表的なものは城下町でしょう。城下町とは、その街の頂点である「大名」の感性が中心となり、同心円をえがくようにその地域の文化が醸成されていったものです。中心すなわちお城や御殿には高い美意識の文化があり、家老や武士、足軽、町民と周辺部へゆくほど美意識は庶民的な要素をくわえていきます。また街は同じ一つの美意識にもとづいて構成され、統一のとれた美しい空間となります。

城下町が情緒ある街の代名詞のように語られるのは、その大名の高い美意識が根底にある街並みや文化の統一性にあるとも言えます。また城下町よりも時代をさかのぼれば、武家文化のさらに典型的な街は鎌倉です。鎌倉幕府の武家文化と渾然一体となった寺院の文化がこの街を構成しています。

いっぽう、公家・貴族文化の最右翼は京都とされることが多いようです。しかしこれには少し異論があるようです。京都の街は武家の原点の一つとも言える足利将軍家によってつくられた部分が多く、とくに禅宗（臨済宗）寺院は将軍の影響が非常に大きかったようです。また京都を代表するもののひとつ、金閣寺、銀閣寺は将軍によって建てられたもので、それぞれの時代の武家による政治の中心的な役割をはたしました。このように武家によってつくられたもの、武家の影響を強く受けたものが京都に大きな部分を占めていることが分かります。

京都に公家・貴族の印象が強くなったのは、じつは明治時代につくられた平安神宮などの役割がおおきいと指摘する識者もあり、それは妥当な見解と思われます。つまり、明治維新によって武家から政権を奪還した天皇公家は、その威信にかけて京都を公家文化の印象が強い街にと、わずか一つ二つの建物で効率よくつくり変えたといえるのです。

このようにみえてみると、「質実剛健の武家文化」と「雅の公家文化」という区別のしかたは思ったほど簡単にはいかないことに気がつくでしょう。しかし武家は、とくに大名や上級の武士などは、自らの出自が「武家」であることにこだわり続けてきました。その理由は何だったのでしょうか。

三種の神器

かつて日本の歴史のなかで天皇の権威を象徴するものとして『三種の神器』がありました。今日でも皇室やその他の場所に該当するそれなりの意味のものがおさめられています。

一つは八咫鏡やたのかがみです。八咫は大きさを表し、つまり鏡のことです。かつては多くが銅の鏡でした。古い銅鏡ではその裏面の模様や縁の形が制作された時代や国を特定するのでそちらに目がゆきがちですが、当時の文化や祭りごとのなかで重要だったのはもちろん物を映すという鏡としての作用です。ものを映す、つまり見ることの不思議な道具である鏡は、陰陽でいえば陽、あるいは火を象徴するものでした。今日でも神棚に鏡を配することが多いのは同じ系譜の考え方といえます。

もう一つは八咫瓊勾玉やさかにのまがたまです。八咫瓊は同じく大きさを意味する言葉で、勾玉は陰陽の陰、あるいは水を象徴するものでした。

つまり、アジア古来の哲学の中心である「陰陽」を象徴するもの、あるいは陰陽それぞれのご神体とも言えるものが三種の神器のうちの二つであったことはごく理解しやすいことです。鏡も勾玉も天皇家あるいは天皇という言葉が確立する以前の遺跡から数多く発掘されており、多くの部族や氏族あるいは小国家で鏡と勾玉は祭祀の中心であったことは文献からも分かります。

さて、三種の神器の残りの一つは天叢雲劍あめのむらくものつるぎです。草薙劍くさなぎのつるぎと呼ばれることもあります。

日本の神話にはこの劍の由来が記されますが、鏡や勾玉と同じように、劍も各地の古い遺跡から多数発掘されることはよく知られるとおりです。あるいは、三つのなかでは劍の存在感がいちばん強いとも言えそうです。

祭祀の具としての劍のルーツはさらに古く、紀元前十七～十一世紀の中国四川省の三星堆遺跡にみられます。二十世紀ももう終わろうかというころ、日本の企業も資金参加してのこの遺跡の発掘はそれまでの中国の歴史を塗り替えるような大きな成果をあげました。

そこで発掘されたまさにカルチャーショックともいえる数々の個性豊かな遺品のなかに『玉璋（玉石でできた刀）』がありました。もちろん祭祀のための劍で、この文明が滅ぼされた後の、やや離れた金沙遺跡でも同様のものが発掘されており、飛び咲きするような不思議な文化の連鎖がみられることもたいへん興味深いところでした。



玉璋（ぎょくしょう）のイメージ画（華林）

前号で述べたように、個性豊かな大型の青銅器や金器が大量に発見されて大きな話題をよんだ中国四川省の三星堆遺跡（紀元前十七～十一世紀）では、祭祀のための石の劔（玉璋）その他の玉石器が何体も出土しました。「玉石器」は透明感のある独特の石材＝玉石(玉)を磨いてつくられるものです。そしてその十数年後に同じ四川省の金沙遺跡（三星堆文明のやや後の時代＝前十四～八世紀）から多くの青銅器や玉石器などが発見されたときは、その内容が三星堆とたいへんよく似ているのでまたもや話題となりました。そしてここでも玉石でできた劔が多数みつかりました。

このころの祭祀のための玉石の劔は、形状によって玉璋または玉圭と呼ばれ、紀元前十七世紀ごろの河南省の二里頭遺跡や、三星堆と同じようなころの陝西省、湖北省、福建省、広東省やヴェトナムなどにもみられるそうです。つまり中国に統一国家ができる以前に広範な地域の幾多の場所で祭祀にもちいられていたということで、さらに古くは紀元前二五〇〇年～二〇〇〇年（新石器時代）の龍山文化（山東省）にも同様のものがあるそうです。同じ系統の非常によく似たこれらの祭祀の文化が遠く離れた場所で時代もおおきくへだてて別々に定着していたことは、考えてみれば不思議なことです。この事実はアジアを語るうえで重要でしょう。



玉璋（ぎよくしょう）のイメージ画（華林）

のちの時代には、祭祀のための劔・剣は青銅製のものが、さらには鉄製のものも多くなってゆくようです。また地域や時代によって形や大きさにも個性が生まれてゆきます。鑄造技術が発達して青銅の、さらには鉄の劔がつくられていったのは自然の成り行きだったでしょう。

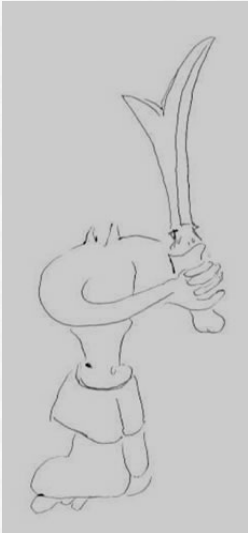
三星堆や金沙遺跡のような古い文化では、青銅や金で多くの神像などをつくっているにもかかわらず、劔（璋・圭）では玉石を削り磨き上げてつくったものがほとんどのようです。以降、時代が新しくなるにつれて青銅製の劔が多くなって玉石のものは少なくなってゆきます。石を磨いて形をつくるのは大変な作業でしょう。古い時代には、神まつりにもちいるのは石(玉石)の方が青銅や金よりも適しているとされたと考えることができそうです。それが時代を経るにつれ、より容易な青銅の劔に変わっていったのではないのでしょうか。

古代中国以来の陰陽五行の哲学では万物は木火土金水の五つの働きで動いているとしますが、そのなかの「金」は物質では金属と石の両者を意味します。これらの古い遺物にも火(日)などを象徴するものがあると解説さ

れ、五行の哲学の原形のようなものはあったと思われます。三星堆のように祭祀のためと思われる青銅と石製の具だけが大量に発見される時は、それらが残存しやすいという点を割り引いたとしても、それが後の時代で言う五行の「金」を重視した文化だったと考えることが十分に可能です。そして鉱石から抽出される金属ではなく、自然のままの玉石を上位のものと考えていたことは、興味深いところです。

古代中国の祭祀のための劔は、古代日本の銅劔、銅鉞などのルーツと考えることはもちろん可能です。祭祀としての劔と武器としての劔については、どちらが先か、どう区別するかなどにさまざまな説があるでしょうが、中国までさかのぼって一貫したものとしてみると、古い時代には祭祀のためと考えられるもののほうが圧倒的に多く、じっさいの祭祀の場では劔を祭壇などに立てて、あるいは祭祀の装束を身につけた人が手に持って立てていたと考えるのが妥当と考えられます。武器としての劔は後の時代につくられ、また形状もかなり違ってきます。

日本の三種の神器のなかの劔や、その原形といえる多くの部族が祭祀にもちいていた銅劔もまた、古代中国以来のこの劔の文化を受け継ぐものだったでしょう。たぶん、他の多くの文化と同じように、祭祀のための劔の文化も中国・大陸で先に消滅し、日本で独特のものとして醸成されていったのではないのでしょうか。



持璋小人像（三星堆遺跡）のイメージ画（華林）。祭りごとではこのように璋(劔)を持っていたのだろうか。